

平成21(2009)年度の国際教養の取り組み

The Global Liberal Studies Activities in SY2009-2010

国際教養委員会 秋山寿彦 古家正暢 山根正博

(Toshihiko Akiyama Masanobu Furuya Masahiro Yamane)

はじめに

まず前号の「平成19年度・平成20年度の国際教養の取り組み」の冒頭を引用したい。

平成19年4月に開校した東京学芸大学附属国際中等教育学校では、学校設定の新領域として国際教養<註1>(国際教養については、平成20年6月に実施した第1回公開研究会冊子、「未来を開く中等教育学校の学びのすがた」P9～P11を参照。)を設定した。国際教養は、本校の教育課程上において、学習指導要領で示される総合的な学習の時間、道徳、及び学級活動を統合し、更にそれらの領域と教科学習との関連を図り、学習の深化、補充、統合をめざす学習として位置づけられている。

同時に、国際バカロレア機構(以下IB)のミドル・イヤーズ・プログラム(以下MYP)の認定校となる準備に取り組む本校では、国際教養の学習は、学習への姿勢(ATL)・多様な環境・人間の創造性・コミュニティと奉仕・健康と社会生活という5つの領域の相互作用・関連(AOI)を背景に、人間理解・国際理解・理数探究・LEを柱として、内容構成を図っている。

前号から1年たち、本校は無事MYPの認定校となったのだが、認定校としての基準を満たさなくなれば、すぐに認定は取り消されてしまう。MYPの理念を意識したカリキュラムの進化を継続していかなければならない。その活動の一環としての、平成21年度の国際教養の学習活動のありようを報告したい。

1 第2学年の実践

はじめに

本実践は2009年度の第2学年(第2回生)の「国際教養」の記録をまとめたものである。第2回生の担任団は、入学式前の学年会において、本学年の学年目標を検討した。IBの教育理念に基づくとともに、簡潔明瞭で、絶えず生徒に問い続けられるものということで『自分に何ができるか(What can I do?)』を学年目標とした。

2009年度、学校として「MYP5領域」の一つ“Community and Service(CS)”に力を入れることを宣言した。生徒一人一人にCSノート配布し、提出を義務付け、教師が一言コメントを書いて返却するシステムを構築した。学校がボランティア活動を推進する主体となったのである。自主性を重んじるべきボランティア活動にあって、学校がボランティア活動を推進する主体となることに疑義を差し挟まれる方もあるかもしれない。しかし、子どもたちに社会の一員として『自分に何ができるか』を問い、ボランティア活動に興味・関心を抱かせるだけでなく、実際行動に移す支援をすることは大変有意義な教育活動であると考え実践した。

① 学校が呼びかけたボランティア活動

(1) ウォーク&ランフェスタ

保健体育科の教員が主体となって呼びかけたボランティア活動。難病や障がいのある人もない人も共に社会の一員として、お互いに尊重して暮らせる社会をめざそうと呼びかけたものが『ウォーク&ランフェスタ』。別名「しあわせフェスタ」という。しなやかに、あかるく、わかりあう、せかいをつくるフェスタとのこと。ボランティア活動って、こんなにも楽しいことなのだと思感するイベントであった。全校生徒の約4分の1が参加した。第1回の開催ということで認知度が低かったのか、ボランティアの数に比べ、来場者が少なく手持無沙汰の生徒もいた。しかし、FC東京の本拠地：味の素スタジアムで開催されただけに、生徒は大きな満足感を得ていた。

(2) 練馬光が丘ロードレース

本校は、言うまでもなく東京学芸大学の附属学校である。市区町村立の公立学校と違い、学区域もなく、地元とのつながりも往々にして弱い。そこで、常日頃、部活動の大会等でお世話になっている練馬区体育協会が主催するロードレースをお手伝いすることとした。具体的には、選手受付・給水・交通整理・参加賞配布等をお手伝いした。

ここに、交通整理を担当した生徒の声を紹介する。

「ぼくは横断歩道での交通整理の仕事を、おじさんやおばさんたちとすることとなった。そこで見たものは、大人たちの醜いエゴであった。選手は、なぜ横断歩道を渡る人を止めないのだと怒り、『選手が通過中ですから、お待ちください』と通行人に呼びかけると、今度は通行人から、信号が青なのに、なぜ…と怒られた。マラソンとか駅伝をテレビで見られるけれども、選手だけでなく、裏方として、さまざまな苦勞をする人がいて、それで初めてレースが成立するのだと思った。でも、もう少し他人にやさしくなれないのかなあ…」

② 学年で取り組んだCS活動

(1) スクールフェスティバルでのSHOP

本校は、「国際」の名を冠している学校でもあるので、スクールフェスティバル(学園祭)の際の模擬店においても、国際色豊かな物品を販売しようと考えた。ただ単に海外の物品を販売するだけなら、誰にもできるであろう。私たちは、フェアトレード商品と海外ボランティア団体の商品を販売することとした。

(2) 海外ボランティア講演会

国際的な海外ボランティアを紹介するため、3回連続の講演会を実施した。

A. アフリカ農業支援

「アフリカ理解プロジェクト」の白鳥清志氏をお招きして、アフリカの農業支援について講演をしていただいた。写真やグラフを数多く使った大変わかりやすいプレゼンテーションであったので、講演後、さまざまな質問が投げかけられた。一例を紹介する。

▶ 遊牧民の少年たちが乾季の間、ラクダを追って家を3ヶ月空ける間、食べ物はどうしているのですか？

- ▶ 私たちが行っている募金はアフリカの人々にとって効果があるのでしょうか？ 小さなお金でもアフリカの人々を救えるのでしょうか？ なぜもっと大きな寄付を日本政府は行わないのでしょうか？

B. カンボジアの平和構築支援

筆者・古家が「アジアの地雷・不発弾被害を伝える会」の理事をしている関係から、実体験を話した。教え子のピアニストや声優に呼びかけて実現した手づくりチャリティコンサート。支援金をもとにカンボジアで植樹した木々。しかし、若木の新芽を牛に食べさせてしまう現地の人々。元地雷原に立つ巨大カジノホテル。「支援」の難しさを伝えた。

- ▶ 同じように植樹をしたのに、アカシアの立派な並木道ができたところと、ハゲ坊主の道ができたところとの差は、現地の人々と一緒に植えたか否かと聞き、大切なことは、現地の人と一緒に汗を流すことだと思った。
- ▶ 元地雷原にカジノホテルが建設されてしまうようなら、地雷を取らない方がいいという声もあるのかもしれない。だけど、地雷は子どもたちを傷つけるものであるから、カジノホテルができようとも地雷は完全に取るべきだと思う。

C. ビルマ難民キャンプでの図書館づくり

本校図書館司書：渡辺有理子氏は、2000年9月から3年間、ビルマ難民キャンプの図書館建設及び人材養成に関わられた。そこで、このビルマ難民キャンプでの経験をお話していただくこととした。

地球儀や地図帳にはミャンマーと表示されているビルマ。なぜ、ビルマの少数民族であるカレン族が隣国タイの難民とならなければならなかったのか…。食事にも事欠く難民になぜ本が必要なのか…。図書館の開館を心待ちにする人々とは…。図書館の開館で終わりなのではなく、今後の運営主体となる現地の人々の人材養成の大切さ等々をお話いただいた。

- ▶ 物静かな渡辺先生が、難民キャンプの図書館づくりにあたられていたなんて正直びっくりしました。一人で見知らぬ土地を訪ねて怖くなかったのかなと思いました。
- ▶ 私たちは、学校の図書館だけでなく、地域の図書館があることを、あたりまえのように思っていたけれど、本がない・図書館がない生活があることを知り驚きました。しかし、それ以上に驚いたのは、そのような生活があることを知り、それでは私が図書館づくりをしようと思いついた渡辺先生の勇気です。すごいと思いました。

(3) フィールドワーク

これまでの学習を確実なものとするため、「Community and Service」「ボランティア」をキーワードとするフィールドワークを12月に実施した。自ら設定したテーマに基づき、自ら訪問先を選定し、インタビュー取材を行った。ユニセフ・JICA地球ひろば・WFP国連世界食糧計画等々を訪問した。特に、フリー・ザ・チルドレン・ジャパンを訪問する予定であったグループは、偶然、創設者のクレイグ・キールバーガーが来日することを知り、来日記念イベントに参加し、クレイグと親交を深めることに成功した。改めて、帰国生の高い英語力は大変役立つということを感じた。

このフィールドワークでの体験を共有しようと、訪問先事業所・保護者を招待して、CS

発表会を3回にわたって行った。劇・映像・新聞・パワーポイント・Role Playing Game 等々を活用して他者へ伝えるための創意工夫された発表であったとともに、自分の目で見て、自分の耳で聞いたことの発表であったので中味の濃い発表となった。

③ ホームルームで取り組んだCS活動

(1) 近隣の幼稚園でのお手伝い

学校行事の振替休業日の一日、近隣の幼稚園へお邪魔して園児と共に過ごした。朝7時40分集合。朝礼・朝の清掃。8時頃より園児を乗せたバスが次々に到着。園庭で体操。遊んだ後は各クラスへ。絵本を読んだり、文字や音楽を楽しんだり、一緒にお弁当を食べたりしているうちにあっという間に1日は過ぎていった。2時半頃、園児たちが帰って行く中、感謝の気持ちを込めて絵本の整理や教室の清掃を行った。最後にお茶をごちそうになりながら、先生方から貴重なお話を聞くことができた。生徒の感想から…

- ▶ お弁当をすべて食べられた時に「全部食べられたよ、先生！」と私のところに来たので、先生のまねをしてハイタッチをした、そうすることによって食べ物の好き嫌いもなくなり、満足感が得られるのだと思った。
- ▶ 最後に先生方がお話ししてくださった時「なるべく子どもを見守るようにしています。」とおっしゃいましたが、私はそれが一番大変だと思いました。子供たちが着替えているとき、ボタンが取れなかったり、リボンを取れないときなど、私はついつい手伝ってしまいました。今、少し後悔してしまいます。また、子どもが折り紙を切って、ものを作っているときに、隣で見ていて手を切らないかととてもハラハラしました。先生方は落ち着いてものの使い方を教えているのを見て、さすがだなと感じました。

(2) 石神井公園落ち葉集め

石神井公園再生フォーラムの要請を受け、石神井公園の落ち葉集めをした。落ち葉は放っておくと風に舞い池に落ちる。池に堆積沈殿すると、水質の悪化を招くということで、有志・クラス単位等で3回にわたり行った。

- ▶ 有志で行った時には感じなかったことを今日のホームルーム活動では感じた。それはボランティアに対する意欲の差・熱さの違いだ。ぼくは、やはりボランティアは個人で行うものであり、ホームルーム単位で行うものではないと思った。たとえ多数決で決めたとはいえ、教室の掃除とは違うのだから、意欲の低い人と一緒にやるのは問題があると感じた。

おわりに

1年間の活動を振り返って、“Community and Service (CS)” ノート最終ページに、子どもたちは次のような感想を書いた。

- ▶ 今年、初めてボランティアに積極的に参加するようになりました。一番は学校がボランティアに力を入れてくれたからだと思います。ボランティアの定義は、自発的にある活動に参加する人。特に社会事業活動に無報酬で参加する人。(大辞林)とされてい

ます。さまざまなボランティアを行う中で、この定義が違うことに気づきました。ボランティア活動では、自分以外の人たちからパワーをもらっているような気がしました。つまり無報酬などありえないのです。ボランティアをして「ありがとう」という言葉をかけてくれる。そんな報酬が、どんなものよりも大事だと考えを変えることができました。来年もボランティア活動を続けていきたいです。

- ▶ 今まではボランティアといったら、学校や町で行われていた赤い羽根募金程度のことしか自主的に行ったことがなかったのですが、Community and Service に力を入れた今年、フェアトレード・いろはす・nepia など社会環境に良い商品の購入やペットボトルキャップの回収など、さまざまな活動を通して多くの人にかかわれました。今後最も力を入れたいことは「家の手伝い」です。今年の活動を振り返っても、「社会」に目を向けていて、一番身近な「家」のことは何もしていない傾向があったので、来年度からは「社会」と「家」の両方に目を向けていきたいです。
- ▶ ボランティア活動をする前に一度現場を見ておくことが必要である。そうすれば「自分に何ができるか」を考えることができる。最も大切なのは、そこでどのようなことが必要とされているのか、現場の人の声をしっかりと聞くことだ。必要とされていることと、お手伝いしようとしていることが一致しないと、かえって迷惑をかけてしまう。「自分に何ができるか。そこで何が必要とされているか」を見極める目を養うことがボランティア活動にとって最も大切なことである。

2 第3学年の実践

はじめに

本実践は2009年度の第3学年（第1回生）の「国際教養」の記録をまとめたものである。本校はMYPに準拠したカリキュラムを敷いているので、4年次にはパーソナル・プロジェクトに取り組むことになる。国内の既存の実践でいえば、個人研究が一番近いだろう。3年次にその準備として、国内ワークキャンプと連携して、生徒それぞれが課題を設定し、探究活動を行う活動を設定した。パーソナル・プロジェクトの準備という位置づけなので、プレ・パーソナル・プロジェクトと銘打った。

① 国内ワークキャンプ

国内ワークキャンプについては、個々の生徒の興味・関心の広がり可能な範囲で対応するために、国際理解・人間理解・理数探究の3つのコースを設定した。1回生については、2009年2月9日に、業者の担当者を招き、それぞれのコースの説明会を行った。コースの概略については、以下の通りである。コースの概略に続いて、各月の活動を記しておく。

コース概略

国際理解コース（主な行き先 阿蘇・長崎）

ねらい：世界遺産登録を目指す阿蘇・長崎について学び、英語で情報発信することを目指す。

内 容：阿蘇についての学習をネイティブスピーカーとともにに行い、長崎では留学生と英語によって交流する。

人間理解コース（主な行き先 水俣・菊池）

ねらい：水俣の公害や菊池で行われたハンセン病隔離政策について学び、社会、産業、法律などと人間のかかわり方について考える。

内 容：水俣で暮らす人々の日々の暮らしに触れ、公害による被害とそこから立ち直ろうとする姿を学ぶ。ハンセン病に翻弄された人々の生きざまについて学ぶ。

理数探究コース（主な行き先 屋久島）

ねらい：世界自然遺産に登録された屋久島において、自然の多様性に触れるとともに自然と人間の関わり方について考える。

内 容：屋久島の動植物について、事前に調査したうえで、可能な範囲で現地で実物に接する。屋久島で暮らす人々の自然との関係の取り方を調査する。

年間の活動

2009年3月～4月 課題設定とコース決め

春休みから4月にかけて、生徒が課題設定を行い、課題意識の希薄なものについては、課題の再設定を求めた。また、探究活動の過程を記入するためのノートを配布し、学校以外の場でも探究活動に取り組むよううながした。4年次に行うパーソナル・プロジェクトでも、取り組みの過程を記録したプロセスジャーナルの提出が必須であり、来年のための練習という意味合いもある。

生徒の設定した課題の一部を以下にあげておく。

国際理解コース

- ・世界遺産に登録するために阿蘇の自然と文化がどのように関わり合っているのか考え、それを国外にアピールするためにはどうすればいいか？
- ・なぜ世界には多くの宗教があるのか？
- ・なぜ阿蘇はまだ世界遺産登録されないのか？
- ・なぜ長崎は外国との窓となっていたのか？

人間理解コース

- ・周りの人や政府はどのように水俣病とハンセン病と向き合ったのか？
- ・水俣病、ハンセン病の患者さん向けの商品とはどのようなものだろうか？
- ・差別と社会的意識とはどう結びつくのか？

理数探究コース

- ・自然保護と観光はどのように両立させていくことができるか？
- ・噴火から自然を再生させる一番の力は何か？
- ・自然にとって世界遺産の登録は必要か？
- ・地球をめぐる水の循環は生物に何をもたらすか？

- 5月 校外学習とその準備（事前学習の一環として、以下の場所にてフィールドワークを行った。）
国際理解コース 鎌倉市役所世界遺産推進課
人間理解コース 毎日新聞社・チッソ本社・日本弁護士連合会
理数探究コース 筑波自然植物園
- 6月 フィールドワークの結果を受けての中間発表と事前学習
- 7月～9月 ジュニアインターンシップ（職場体験）とスクール・フェスティバルの準備に専念するため、学年としての活動は一時休止。プロセスジャーナルの活動は生徒個人で進める。
- 10月～11月 事前学習と並行して旅行準備
- 12月 ワークキャンプの実施
- 2010年1月 プロジェクトについて報告レポートを提出する。

事前学習において使用した参考資料など

国際理解コース

- ・環境省九州地方環境事務所『阿蘇の草原ハンドブック』 2005年3月
- ・社団法人日本ユネスコ協会連盟 <http://www.unesco.jp/contents/isan/>
- ・東山手地球館 http://www.h3.dion.ne.jp/~chikyuj_frame.htm

人間理解コース

- ・素敵な宇宙船地球号 「死の海からの復活」 ～マイクロ生命体が奇跡を起こす～（2008年6月8日 テレビ朝日）
- ・その時歴史が動いた わが会社に非あり～水俣病と向き合った医師の葛藤～（2009年1月28日 NHK）
- ・NHKスペシャル 「戦後50年・その時日本は チッソ・水俣～工場技術者たちの告白～」

1995年7月1日放送

- ・西村肇・岡本達明著 「水俣病の科学」 2006年 日本評論社
- ・ハンセン病違憲国賠訴訟弁護団『開かれた扉～ハンセン病裁判を闘った人たち』2003年講談社

理数探究コース

- ・「変わる自然遺産～屋久島から」（「朝日新聞 夕刊」2009年5月18～22日）

おわりに

MYPの理念全般について言えることだが、日本の教育のあり方と比べた時に、結果だけでなく、過程を重視する度合いが強い。PPにおいても同様であり、日本の学校で行われている一般的な個人研究と比べて、プロジェクトの成果としてまとめられたものだけでなく、その過程をより重視している。ただ漠然と生徒に「まとめたものだけでなく、その過程も重要だ」と説明しても、これまで個人研究という活動の中で過程を強く意識させられたことのない生徒の場

合、具体的にどう対応すればいいのかということについて当惑することもあるだろう。プロジェクトの目標に照らして、その過程にどんな活動が必要か、そうした問題を自発的に解決していけるようになるのがベストなのだが、すべての生徒をそのような段階に到達させるためには、まだ学校としての積み重ねが必要であろう。1回生がPPPに取り組む中で感じた戸惑い、1回生のPPPを指導して感じた戸惑いをうまく継承していかなければならない。